

## ■ 編集だより

## 編集後記

本誌の編集委員会において、如何にして投稿数を増やすかということは、しばしば議題に挙がる事項である。原著があまりなく、学術総会の講演やシンポジウムに関する原稿が、特集として誌面のほとんどを占める状況が長く続いた。最近、投稿数はやや持ち直してきたようだが、依然として少ないことには変わらない。

その原因として、本誌の査読が非常に厳格で採択率が低いといったイメージで敬遠されていることもあるかもしれない。一方で、せっかくのオリジナルの論文を和文誌ではなく、どうせなら英文誌に投稿しようという風潮が強いことも大きく影響しているだろう。今や多くの医学教育機関では研究業績が点数化され、英文での発表への重みづけがなされるのが通常である。また、博士論文も英文誌に掲載されたものでなければならない取り決めになったということもよく耳にする。和文誌の肩身は狭くなる一方で、日本語で伝えることの意義は薄らいでいくばかりなのか。

この夏、私は代々木公園で開催された「ブラジル・フェスタ」に、救護ボランティアとして参加した。学生時代に研究室に出入りしてお世話になった、慶大医学部寄生虫学教室の三浦左千夫先生に誘われてのことだった。三浦先生はトリパノソーマ・クルージという原虫により引き起こされるシャーガス病を専門とされ、JICAなどで何度もブラジルに渡り、ポルトガル語はペラペラでブラジル愛に満ち溢れ、退官後もNPO活動などを通じて本邦の日系ブラジル人コミュニティでとても頼りにされる存在なのである。

さて、救護テントでは、三浦先生を慕って集まった看護師ボランティアさん達が手際よく処置していた。客の多くは関東近辺から集まった日系ブラジル人達で、年1度のこのフェスティバルで大いに盛り上がり、ステージで演奏される馴染みのリズムに合わせて踊ることを楽しみにして来たのだった。歴史的な猛暑の炎天下、熱中症の方々が多数訪れ「今日のところは帰宅された方が良いですよ」と伝えた時の悲しそうな顔。そんな魅かれる音楽を聴いてみよう、西日が傾きはじめてステージに行ってみた。歌詞も司会の言葉も、聴衆との掛け合いも、ブラジルの言葉ばかりで日本人の私にはほとんどわからない。けれども、彼らはそんなことは構いなしに、同じ文化と価値観の中でのコミュニケーションを、心から楽しんでいるようであった。

何かを伝えたいとき、伝えたい相手に届く言語で表現する。ごく当たり前のことであるが、「論文」の世界ではうっかりそれが忘れられていることが少なくないように思われる。世界への発信も重要で不可欠だが、伝え共有したい主な相手が日本人である時は、英文で執筆してわざわざ「逆輸入」する手間をかける必要もないであろう。近年、臨床現場における多職種連携が定着し、知識向上やスキルアップのために、医師間のみならず他の医療スタッフとも文献や資料のやり取りを行う機会が増える中で、「日本語で書かれたものはないか」との要望をよく耳にする。

日本人が共有する言葉と文化を背景に、互いの知識を高め理解を深めあう和文誌・精神神経学雑誌の、さらなる可能性を探り内容を充実していきたい。私達が日頃行っているのとは反対に、海外の読者が和英辞典を片手に本誌を逐一翻訳して読み進める姿が、いずれ見られる日を空想しながら。

根本隆洋